

〔巻頭言〕

どこへ行く，SPF 養豚！

岩 瀬 俊 雄

日本 SPF 豚協会が毎年発表している「認定農場の生産成績年次報告」を見る度に思うことがあります。それは、同じ SPF 農場であって、何故これ程大きな成績の差があるのだろうか、ということです。1 母豚当りの年間肉豚出荷頭数*で見ると、最上位 (25.61 頭) と最下位 (15.71 頭) の差は、約 10 頭*。母豚 100 頭の農場であれば、肉豚出荷が 1,000 頭も違います。もちろん、飼っているブタの品種や豚舎の構造、飼い方、飼っている人の技術などの違いが影響しているかも知れません。しかしながら、最も問題なことは、これが高い衛生水準にあって高い生産性(「数」だけでなく、「質」も)を実現するという「SPF 理念」の下に豚を飼っている農場群だということです。

それでは、この SPF 養豚の目指しているところと実際との隔たりは、どうして生じたのでしょうか？ 出荷肉豚 1 頭当りの A 分類薬品費*では、0 円から 445 円まで、農場飼料要求率*では、2.86 から 3.58 までと、その差は極めて大きいのに驚かされます。この分が、生産原価の多寡を左右します。おそらく、いろんな背景、事情、そして理由が列挙されることでしょう。その上で、このような現状を見るにつけ、SPF 豚農場のみならず SPF 関係者の中に、「SPF 理念」の風化、易きに流れる風潮が徐々に高まってきて、SPF の看板だけが独り歩きし始めたのではないかと、心配しな

いではられません。もちろん、SPF 豚農場と云えども、困難に立ち向かわねばならない状況に置かれていることも、安易に無視するものではありません。

この、SPF の出発点である「SPF 理念」は難解な理論ではなく極めて単純明快なものですが、どうしても守り切らなくてはならないものと思います。理念への回帰は観念的であってはならないし、理想論に過ぎてもダメだとも思います。現場(豚舎)で、意識して実際に取り組むことです。豚舎の中に入って、「ブタ達は、ここにいることを喜んで(満足して)いるのだろうか?」、「ブタ達が喜ぶに足るほどの気持ちの良い環境を提供し、養ってあげているのだろうか?」…こんな視点で今一度見つめ直してみてもはどうでしょうか？

成績上位の SPF 豚農場では、衛生を重視した着実な取り組みが日々為されていますし、ブタにも豚舎にも飼うヒトにも「SPF 理念」が深く染み渡っています。このような農場からは、「特別なことはやっていない。当たり前のことをやっているだけだ。」との声をよくお聞きます。この意味としては、「基本からぶれず、とことんブタとつきあう」と同義ですが、安易な受け止め方では真髓を掴み損なってしまいます。

SPF 豚農場のブタ達は、農場の清浄性と快適性によって、すくすくと育ち、この結果、お肉は美

味しい—この一連の素朴過ぎるほど単純な過程こそが、末長く消費者の支持を得る、本当のSPF養豚ではないでしょうか。農場や関係者の取り組みの一つ一つの積み重ねが、「SPF豚肉は美味しい」との声として、世の中にしっかりと根付くことになるものと思います。決して「初めにSPF

豚農場の看板ありき」ではなく、「初めにSPFのブタとヒトありき」なのです。

*日本SPF豚協会年次報告・平成23年度生産成績集計（一貫生産農場）に拠る。